—

この年になりますと断るということはもうやめようと。さっき三帰さんの挨拶でありましたけれども、資格があるとかないとかということになりますと、ないに決まっているわけで、ですから断らないということでお引き受けしました。したんですが、先生がお亡くなりになりましたもう十五年以上になります。来年は十七回忌ということになるわけですが、前に鸞音忌の安田先生のお話しを集めてくださってその2冊目がたしか安田先生の十三回忌のときに記念として出て、その終わりに「十三回忌に思う」という題で宗さんと藤元君と私が短文を書きまして、その編集後記、というよりも宗さん藤元君、僕よりもっと内容の濃い後書きを宮城君が書いてくれました。今度安田先生のことをとってそれを開いて自分の書いたところを読んでもみましたが、その後一向に進歩がないんです。つまりこの中のお若い方は安田先生を御存じない方もあるかと思いますが、この大地の会で十年近く安田先生のお話しを聞かせていただきました。そのあとたしか宮城君が翌年だったと思いますが、「皆悉く過ぎたまいき」〈皆悉已過〉という題で話してくれたと思います。

たしかにこの会が始まって曾我先生、金子先生、蓬茨先生、安田先生、我々の先生方がお亡くなりになって「皆悉く過ぎたまいき」ということではあるんですが、一方ではどうも安田先生がお亡くなりになったという実感がいまだに僕にはありません。これは僕だけではなくて藤元君も十三回忌のときにそう書いてくれています、肉体が減びるということはどういうことなんだろうかと思えるほどほんとに先生がなくなられたという感じがありません。亡くなられた直後はやはり人間並に寂しい思い悲しい思いがしたんですけれども、どうも先生がいなくなっちゃったという感じがありません。そんな感じがずっとしております。

十三回忌の記念のときにも書いたのですが、最近脳死をどう考えるかという非常にややこしい問題が国会の場で論議されております。ああいう大事なものを国会議員あたりで決められたらたまったものじゃないと僕は思っているんですが、この年になりますとももちろん親も失いましたし、兄弟も失いましたし、今申し上げました先生方ともお別れしているわけですが、今の自然科学的、技術的、医学的観点から脳死というものをある一点に定めるということはどうにも僕はうなずけないんです。たしかに生物学的に体が減びると、瞳孔が開いて心臓が止まって呼吸がなくなってやがて体が冷たくなっていくと。その段階のある一点を死だと認めることは自然科学的なあるいは科学技術的な点ではそうかもしれません。つまりそこから元の生命へ帰ってこないという、そういう意味ではある一点かも知れませんが、それはどうしても僕にはうなずけない。うなずけない理由が二つありまして、一つはよく個体の死と、脳死を個体の死と認めると、こういう言い方がされますが、個体といいましても、これは僕なんかが言うべきことでもっと詳しくお話できる方がいらっしゃるわけですが、縁起という立場からすれば、さまざまの縁が私において出会ってこの私という人間がいるわけですから、たとえば私の父親にとっては息子でしょうし、私の子どもにとっては父親でしょうし、学生にとっては先生でしょうし、という形でさまざまの縁が私のところで結ばれて私というものが仮に成り立っている。そうするとそういうところで個というものだけを取り上げて死というものを考えるということは、何度も言いますが生物学的な意味ではそう言えるということはあると思いますけれども、そもそもそういう意味での個というものを仮のものとする見方からすると、死ということが一人の人間に起こっているという考え方自体がどうなんだと。もしそういうことでは、生まれたときに生命を与えられた。そうすると死という生命の終わりという点でその人が消えることになるわけです。これは自然科学的な事実としてはそうなんだろうが、どうも僕はそう思えない。それからもう一つは死を個の一点と考えるという考え方がうなずけないんですね。これは親しい人を失った方皆さんがそうお思いだと思いますが、死というのは自分では経験できないわけですね。死を経験するのは他者において他の人において経験するわけです。そして死を個人にあるとどうも考えられないのは、例えばある人が亡くなります。そうすると仏教の習慣からすれば、それが必ずしも仏教かどうか僕は分かりませんが、普通の日本のセレモニーとして湯灌をしてお通夜をして、そしてお葬式をして茶毘にふしたりあるいは土に返したりする。それから初七日が来、

二七日が来、だんだん時間が経って一周忌が来、三年が来、という形で私の言葉でいえば一つの儀式としてセレモニーが行われるわけですが、そういうセレモニーは生き残ったもの、生者が死者と別れていく過程だろうと思うんですね。

ですからある一点である人が死んで亡くなったということではなくて、なるほど体は土に帰ります。目にも見えなくなります。お声は聞こえなくなります。ですけども安田先生にかぎらず自分に親しかった人が亡くなったことは十分承知しておりながら、完全に消えてしまったという気持ちになれないのは、それは私の記憶とっていいと思いますが、記憶に生きていてくださる。そうすると安田先生の死が完結するのは私が死ぬとき、安田先生は亡くなられましたが先生の死は安田先生のことを思っている人がいる限り死者としてずっと続いているわけで、先生の死を完成させるのは我々じゃないかというようなことすら思います。さらに今、世の中がどんなになっているのか分からない状況ですから分かりませんが、もしまだ地上の生活が続くとすれば、私たちの後に残る人たちにおいて私たちの死が続行して行って、そして私たちの後に残った人が死者となるときに私たちの死を完成してくれる、そういうふうにして死というものを考えざるを得ないように思います。

今の脳死の問題というのは明らかに臓器移植のために考えているわけですから、本人の承諾だとか周囲の人の承諾だとかいう話ばかり進んでいますけれども、本来死というのは点ではないんじゃないかというようなことを安田先生の記念のことを考えているときあらためて思いました。そういう意味でおそらく私にとってだけじゃなくて、多くの方にとって安田先生というのはなるほどお亡くなりになったけれどもお亡くなりになっていないと。そういうことに多分なるんだろうと思います。ですから先生がお亡くなりになって十五年たちますが、そういう意味で安田先生という方は私にとってはずっと生きてらっしゃる。何かあるたびに先生に相談したら何とおっしゃるだろうかというようなことも考えます。もちろんお言葉は聞こえませんが。そうすると先生がお話くださった内容、あるいはお書きくださった本、そういうものを読むことによってお答えをいただく、あるいはこちらの間を試される、あるいはこちらの間を訂正されるというようなことがあります。にもかかわらず、まだ生きているとしか思えない安田先生から何を聞いたのかということになりますと、これは大変恥ずかしいことですがこれというようなことを聞いている自覚がほとんどないんです。

二

私は文学というような、文学研究というような中途半端なところから学問を始めましたので、文学はけっして中途半端だとは思いません、ですけど文学研究というのはかなり中途半端なものではないかと思いますが、そういうところから自分の学問を始めましたので、真宗学仏教学というような学問をやったわけではありません。それから哲学というものも学問としてきちっとやったということでもありませんし宗教学という学問をやったわけではありません。ですから、それと生来の怠け者ですから、先生の講義をうかがうときもノートを取るわけじゃありませんし、テープを取って後で聞き直すということでもありませんし、大地の会の事務局の方がテープを起こして大変な努力で出してくださる大地の会の聞法記録も隅から隅まできちっと読むというようなことはしていないのです。ですから何を聞いたんだといわれるとほんとに困るんです。で、その何を聞いたかということなんですが、これは先生がお亡くなりになってからだと思います。藤元君が中心になって大地の会を続けてくれてから安田先生の奥様の安田うめ婦人が相応学舎にいらっしゃる間は大地の会がすむと、年寄りの役得でしょうか、宗さん藤元、宮城、それから和田先生に僕という5人くらいで、「今年も終わりました」というご挨拶に相応学舎にうかがっていたのですが、先生が亡くなられて2年目位だったと思います、安田うめ婦人がポロッと主人が亡くなる直前に大変なことがありましてね、というお話ししました。何だろうかと思って聞いていましたら、先生がたしか二月の十九日にお亡くなりになっていますが十七日の晩、どこか地方に先生はご出講になったようです。そして奥さんのお話ですと、なんとなく自分の死を予感していたのではないかと後から考えてみると思うとおっしゃっていましたが、その先生の熱のこもったお話がすんだとたんに先生の話聞いていた人たちが世間話を始めたんだそうです。そのときに先生が、

かなり大きな声をお出しになって、「君たちは三十年何を聞いてきた」とおっしゃったそうです。で、奥さんの話ですと、私はどこにいていいかわからないような、身の置き場がないような感じになりました、とおっしゃってありました。

そういう話をちらっとなさったんですね。そしたら隣にいらした和田先生がちらっと何かおっしゃったんですけれども僕にそれが聞こえなかったんです、よく。それで先生の相応学舎を辞してタクシーに乗ってから、隣にお座りになった和田先生にさっき何とおっしゃったんですかと聞いたら「寺のものだ」ということをおっしゃったんです。先生はあまり説明なさらないので「それどういうことですか」と聞きましたら「寺の者は法が聞けないんだ、清沢先生も安田先生も在家から菩提心を起こして仏道を歩まれた。なのにわれわれ寺に生まれた者はその法がちゃんと聞けない、先生方は非常にさみしい思いをしてらしただろうと思う。」そういうふうで後で説明してくださったんですが、そのことは安田先生や安田うめ婦人の言葉以上に僕にはいまだに強く残っております。

安田先生もときどき半分冗談で、半分本気でという言い方でおっしゃったことがありますね。仏法を一番ないがしろにしているのは寺族じゃないかね、フフフというような言い方でよくおっしゃったんです、僕の耳に残っています。で今度安田先生のことをお話しするのに何を聞いてきたらどうかということを考えたときに、今の話が思い出されて大変先生に対して申し訳ない気持ちがずっとしてきました。一方で申し訳ない、何を聞いてきたんだらうと思うんですが、片一方で、しかし安田先生という人は私にとっては一言で師でした。安田先生の全人格が私にとって師であったし今もありません。

その師という意味なんですが、師といえば師弟ということになると思うんですが、この師と弟子の関係というのは、仏法でいえば法を中心として問と答えという事だろうと思いますね。そういう問と答えが成り立つというのは師弟ではありますけれども同時に友ということがいえるのではないかと思います。これは私事になって申し訳ありませんが、私の父が「友なり師なり仏なり」という言葉を非常に好きで、よく書いておりました。

ご存じの方もあるかと思いますが、宮城君のお父さんと私の父は非常に親しい友達でした。それぞれ性格も違いますが考え方も違うしあらゆる意味で違うんですが、はたから見てもほんとに羨ましくなるような友ということだったんですが、その友に、これは両方からだったと思います。宮城のお父さんから僕も父親からもそうだったと思いますが、師を見ていたんですね。友達ができるということは人生にとって非常に大事なことで、ただその場合の友達というのは、私にはたくさん友達がありますとか、そういうような軽い意味ではなくて、その友達とはあらゆる話が話し合える。話し合わなくてもその友達の顔を見れば問題が解決すると。あるいは問題は解決しなくてもその問題を担っていく勇気がわいてくると。そういう関係が友達というものだろうと思いますね。だからそこにはたえず問答ということが、声に出してするかしないかは別としてあると思います。友ということは、だから、そういう意味での友ですね。ところがそういう友というのは、やはりこわい存在になります。必ず批判される。あるいは批判されなくても自分がいいかげんなことをしているときに、友の前で何も言われなくても恥ずかしくなる。つまりその友に対して恐れを抱き敬いの心を抱く。そうするとその友は友であって同時に師ということになると思うんですね。ところがその師というのは普通の場合そこで終わってしまうのかも知れませんが、そういう友、友情、そういう師弟を成り立たせるもの、その基盤が仏法ということになりますと、師を成り立たせ友を成り立たせるものはやはり仏だ。基本的にはそこまで行かないと人間関係を突破できる道は生まれてこない。そういうような意味で「友なり師なり仏なり」という言葉を父親がよく好んで言ったり書いたりしました。

であるとき田舎から出てくるといつも宮城のお父さんのところへへたりこんで、3日4日泊まっておしゃべりして、たいてい寄せ書きみたいなことをして帰るとというのが普通だったようですが、あるとき「友なり師なり仏なり」という言葉を父が書いてそれに宮城さんが添え書きをされるときに、「そして一緒に落ちるなり」とお書きになったんだそうです。でおそらく二枚書いたんだらうと思いますが、その一枚をもっておやじは嬉しく京都を去って田舎に帰ってきたら、追っかけるようにして宮城さんから葉書がきて、大変申し訳ない添え書きをしたと、君まで一緒に落とすつもりになっていたとそういう詫び状が来たとき、これは父親が

ら聞いた話です。まあ考えようによっては、これは宮城さんの皮肉かもしれないので、「そして一緒に落ちるなり」はかっこに入れておきますが、いずれにしてもそういう「友なり師なり仏なり」ということが例えば安田先生と僕らの間に成り立ってきたかということが今日の私の話の中心になるかと思います。

三

私の方から曾我先生や安田先生を友というのには抵抗があります。感じとして。これはヨーロッパ人の場合は割合に友という言葉がそういうふうに使われるんですね。西谷先生もお亡くなりになりましたが、その西谷先生の宗教とか哲学というものに非常に強い関心を若いころから抱いていたドイツ人の友達がいるんですが、それが西谷先生がお亡くなりになるころ、まだ生きておられたころでしたか小さな本を書きまして、本には献辞というのがありますね。だれだれに捧ぐという。その献辞に「わが師にして友なる西谷教授に捧げる」と。年からいうと半分ぐらいですね。それを日本的にいうと三十や四十の奴が西谷先生のことを友というのは尊大ではないかという感じがはじめはしたんですけど、英語のフレンドに当たるドイツ語では、年だとか社会的地位だとか、そういうこととは一切関係ない師にしてと友ということがどうも言えるようですね。それから気をつけていますとそういうのが割合多いんです。ヨーロッパ世界では。

ところが必ずしもヨーロッパ世界のみそういうことが成り立つわけではないんで、和讃にありますね。「他力の信心うるひとを うやまいおおきによろこべば すなわちわが親友とぞ 教主世尊はほめたまう」すなわちわが親友ということが出てきますね。「他力の信心うるひとを うやまいおおきによろこべば すなわちわが親友とぞ 教主世尊はほめたまう」。だから、世尊が他力の信心を敬い喜ぶひとを親友だとおっしゃっているんですね。そういう点から考えますと多分安田先生は我々一人一人を弟子とは思っていらっしやらなかったと思いますね。どういうふうに言ったらいいでしょうか。友というふうに思ってもらって、それに対して我々がちゃんと友として答えていなかったんじゃないかというようなことを思うわけです。

いずれにしてもそのことについては後で触れられたら触れますが、安田先生から教わったことの一つは、いつも申し上げることで人間の根拠は人間を越えたところにあるというお言葉、これも考えてみればすべての宗教はそうなんです。人間のレベルでは人間の問題は答えられていないと。さっきもそちらで藤井さんから今年の夏に宗教サミットというお祭り事があって東本願寺の方から人権についての報告をしろという話が出ているんだけど、人権の根拠というのはどこにあるんでしょうかね、と非常に重大な問題をお出しになって、まさしくその通りなんで、人権、人権といいながら人権の根拠を問わなくなっていますね。当たり前のことになっていますが、そういうところに、もし人権の根拠を人間に求めるとしたらそれは変なことになるんで、どんな宗教でも人間の根拠は人間を越えたものであるというようなことは当然なことだと思うんですが、そのことが私に安田先生の声を通して初めて響いてきたということがあるかと思います。

つまり人間の根拠を越えたところから響いてくるものを聞き取っていらっしやるという具体的な安田先生の人格というものに触れて、そのことが私にはじめてああそうだったのかというふうに頷けるということがあったと思うんです。で、これはすべての宗教はそうだったもう一つの理由は、前にお話したことがあるかも知れませんが、キリスト教で神ということを言いますね。日本語で神と訳してしまうとちょっと困るんですが、英語では **god** といいますね。でこの神という字がどういう意味をもっているのかも一つ漢字としての意味が分かりませんが、「神」というのは上（かみ）下（しも）の意味でもあると思いますね。ところがキリスト教の神というのはどうもそういうものではなさそうで、創造神、万物を創造したものとかオールマイティーだとかいろいろ言われますが、どうも英語でいう **god** というものが僕にはどうも疎遠だったんです。

ところがここは強調して申し上げたいんですが、さっきも申し上げましたように人間の根拠は人間を越えたところにあるという言葉、たんに言葉としておっしゃっただけでなくて、先生の人格そのものがそのことを明かしているというふうには受け取れた。そういうことはキリスト教徒からも感じられることがあるんですね。ヨーロッパのキリスト教は、一方ではそれこそニーチェが言ったように神は死んだということ

になっていますけれども、そんな簡単なものでは決してなくて確かにキリスト教会の罪業は深いものがありますし現実のヨーロッパ人の大部分は宗教とも何とも思っていない。近代というのがおよそ非宗教的時代だといっていると思います。そういうところで細々とキリスト教的な意味での宗教性というのが生きているのが実態だろうと思います。

ただいくら細々としてであろうとも、そういうキリスト教によって培われた人に具体的に会うところにキリスト教は生きているんだという感じは否定できないんです。キリスト教の教義だとか教会だとかそういうことはどうでもいいんです。それは社会科学的な批判をしたらいいと思います。彼らもしています。しかし本当に聖書に対してそしてその聖書をかなり苦勞して読み抜いている、そしてキリスト者として生きている人に、幸せなことに私はほんの数人ですけれどもヨーロッパで会いました。そうするとキリスト教の教義やその他についてはいろいろありますけれどもキリスト教なんかはとは到底言えない。それはつまり人間の根拠は人間を越えたところにあるという意味ではどう越えるのかとかですね、それがどう表現されるのかということになるとさまざまな風土的規定とか歴史的規定とかそれこそ因縁がありますから、いろいろなものになると思いますが、キリスト教は一神教だからだめだとかというような言い方は非常に浅薄なものになると思います。

つまり洋の東西を問わず、やはり教えが伝わるといいますか響くといえますか、そういう場合には具体的な人格、もちろんお釈迦様がおっしゃっているように「人に依るな」と「法に依れ」ということが一方にはあります。しかしそういう人格を通さずには何事も成り立たないと、そういう意味で安田先生が師であると。仏教の言葉でいえば善知識ということになると思いますが、その師が同時に友であったと。その友である先生を少なくとも私は友として対せなかったというそういう残念な気持ちが残ります。で、さっきも言いましたように先生の体はなくなりましたが先生は亡くなられたとは僕は思えませんから、今から私がしなければならぬ責務というのは安田先生の友たりうるかと、そういう課題だろうと思います。

でこのキリスト教の *god* というのが、まったくアホみたいな話なんですが、ある哲学者神学者の会議でヨーロッパでも有名な学者が集まっていたときにこの話が出ましてね、聞いたことがあるんです。「私はキリスト教徒でもないしドイツ語を母語にもしていない人間だから思い切って単純な、あるいはくだらないかもしれない質問するけれども *god* というのは語源的にどういう意味だい」と聞いたことがあるんですね。そしてみんな知らないんです。つまりそれほど自明なんですね、彼らにとって。考えたこともない。それでそこらへんにあった語源辞典を引いてみましたら、古代ゲルマン語で今の言葉にすると、呼びかけ *A nruþ* というくらいの意味かも知れないと。はっきりしないようでしたね。で *A nruþ* という呼びかけということになるわけですが、その字引には人間が呪文みたいなもので呼びだすものという説明がついていましたけれども、これは強引に牽強附会になるかもしれませんけども、逆に我々に呼びかけてくるものというふうに考えることはできないのかと聞きました。そしてらウンとうなってそういうふうな考え方もできないとはいえないだろうなというそんなことがありましてね、それ以来彼らがいう *god* という概念が割合身近なものに、呼びかけと。だから真宗の言葉に返せば本願の勅命ということでしょう。そうなってくると、一神教だ創造神だというような、そういう教義上の問題はどうでもいいわけで、我々自身が、人間存在があるいは衆生存在が呼びかけられている存在であると。あるいはもっといえば願われている存在であると。そういうことを具体的に証している人がキリスト教にも仏教にもいる限り、仏教なんかだめだとかキリスト教なんかだめだとかいえない。それが具体的に我々にとっては曾我先生であり安田先生であったわけです。ですから、そういう、曾我先生の友達になるというのはこれはちょっとたいへん難しいことだと思いますけども、そういう友となり得るか。お前は友となり得るかという問を今安田先生からいただいたような感じがいたします。その友ということについてももう少し、ちょっと休ませていただいとお話したいと思います。

四

安田先生を友という言葉でいえるかということなんですが、これは何も今始まったことではないので、御

同朋御同行という言葉があります。そうするとそこには初めから今の言葉でいえば友ということが言われているわけです。そのことを安田先生との関係でそのことを具体的に考えてみますと、先生は非常にいい対話者だったと思うんですね。大地の会では先生の講義をうかがってというかたちになっていましたけども、時々僕はむしろ先生に会いたくなって前触れもせず相応学舎に先生をお訪ねしたことがあります。そうするとその時その時の私の関心なり興味なりを見事にキャッチしてくださって、私が問題にしているところを明らかにしてくださる。それは先生がたまたま僕のことに付き合っただけでなくて、先生は先生のままでしかし私の興味なり関心なり考えなりに先生からの光を当ててくださるということがしばしばありました。

それは私の場合はドイツのことにかまけてきましたからいろいろなそういう話を先生にします。そうすると先生が“こうかね”“ああかね”というようなことをおっしゃる。でそのことによって私が考えていたことが“ああそうだったんだな”と思うことがよくありました。その辺でこちらにとって問題になっていることを明らかにするというような形で対話を続けてくださる。これは多分私だけにそうだったということではないと思います。いろいろな人が学問上、宗教上いろいろな問題をもって先生のところをおたずねしているはずですが、恐らく皆さん同じような感じでお受けになったというふうに思います。まあ先生のことですから時々冗談を交えて、あるいは皮肉を交えて、あるとき先生のところをおたずねしましたら、スイスなんかに行きますとお土産に売っているんですが、放牧用の牛がみんな行方が知れなくなると困りますから、大きな鈴の大きいようなやつを首っ玉につけています。それがカランカランと牛が動くたびに鳴ります。で、夏中は放牧してありますから、夏の夕方から夜にかけては、ちょうど日本でいうと盆踊りの歌が遠くから聞こえてくるみたいな感じで牛の鈴の音が聞こえるんですが、そのミニチュア（miniature）本物は大きいですから普通は売ってないのですがミニチュアで小さいのが先生の机のうえにおいてあるので、「先生これはどうしたんですか」と聞きましたら、「ある男がヨーロッパに遊びに行って買ってきてくれた。山登りに行ったらしい、君なんかと違って勉強なんかしに行かないよ」とそういう言い方をされるんですよ。「なんで先生そんなこというんですか」と言ったら「うふふ」と、そういう時にどう言ったらいいのでしょうかねえ、先生には違いないのですけれども、そういうような皮肉を交えて話してくださるときの先生の人格というのが私には本当に忘れ難い。そういう事ばかりでなくて、あるとき、もう十年以上になるかと思いますが、妙なことでオランダのライデン大学に集中講義に行かされることになりまして、いまだになぜそうなったかよく分からないんですが、なんか本願寺の方から大谷大学の方に話が来て、そのとき多分大谷大学は広瀬さんが学長だったと思いますが、広瀬さんからいっぺんてきてくれという電話がかかって何だろうと思って行ったら、こういうわけでライデン大学で三週間ほど集中講義してくれと。「冗談じゃないですよ」ということだったんですが、そのときに文学部長をしていた訓覇さんが「あんた業を作ったんだから」と。「何の話ですか」といったらさっき言いましたスイスにいたドイツ人の神学者と『歎異抄』を訳したりしたんで「そういう業を作ったんだから逃れられないよ」というんで「おれオランダ語できないもん」と最後まで逃げたんですけども「ドイツ語か英語でいい」というんで「おれ英語だめだよ」といったらドイツ語でいいと。

そんなことで行かされそうになったんです。非常に僕困りましてその足ですぐ先生のところに伺って「先生こんな話が出ているんですがどうしたらいいか分からないんです。」と言ったら先生が「君ね、恥をかいてきたまえ。教えようなんて思うから迷うんだろう。」そうおっしゃったんです。これは僕にとってほんとに決定的な言葉でした。どこかで教えようと思っている。だから教えられるかどうか自信がないもんだから、悩んじゃうわけです。ですけど行って恥をかいてむしろ向こうの人から学んでくるというそういう姿勢があれば別に困ること何もないじゃないかという意味だったと思うんですね。

それで非常に気持ちが楽になりまして、行きました。そしていいかげんな話をしてたんですが、「難行道易行道」という話になったときに、ある女子学生が、あのころ十数年前でもあんなになっていたんですね、学生がベンチで横になって聞いていたんですよ。“行儀の悪い奴だなあ”と思っていたんですが、それで聞いてないかといったらちゃんと聞いているんですね。それで難行易行という話をしたらその女子学生がむっくり起き上がって「念仏を称えるのが何でやさしいんですか」とこういう言い方をしたんですね。これは僕は本

当に教えられたような気がしました。修行するよりもやさしいというふうになんとか思っていたところが僕にあったんだろうと思います。ですからその女子学生が「念仏を称えるのが何でそんなにやさしいんですか」と聞いてくれたことが僕にとって非常に勉強になって、その子がその後どうしているのか、初めのうちちょっと二三手紙の往復もありましたがその後はどうしているのか知りません。仏教信者になったかならないかも知れません。知りませんが、そんなことよりも私が教わったということの方が非常に大きいと、安田先生がおっしゃったのはこういうことかなというふうに思いました。この場合でも女子学生が仏教のことを何も知らないのだろうと思いますが、その女子学生が僕に対して、二十代だと思いますが、その学生が気をつけるように僕に言ってくれた。そこにはたしかに一応師弟ではありますが、真実というものに関していえばやはり友だなど、そういうことを大変強く思いました。だから安田先生の場合でも我々が先生を友にするというよりも先生が我々を友として扱ってくださった、そのことに十分答えているかということが問題になると思います。

それからもう一つ先生のことを思うと、先生の外国の思想とか宗教とかいうものについての非常に鋭敏なアンテナがあったということです。これはあまり多くの方はおっしゃらないようですが、たとえば安田先生がお亡くなりになって相応学舎にある書物をどうするかという話が出たときに、結果的には大谷大学に安田文庫という形で全部収まっているんですが、そのとき初めて私は安田先生の書庫に入って、どんな本をおもちなのか見てみました。

で、皆さんご存じのように先生のところは一度焼けていますから、丸焼けになったり水浸しになった本はもうだめですから、あの火事以後先生がお買いになった本だと思います。詳しいことは僕にも分からなかったんですが、大谷大学に収める段階で整理をして図書目録を作って、その図書目録の終わりに今大谷大学の学長をしている訓覇さんが短い文章を書いておりますが、こんなことを書いてあったんですね。ギリシャから現代に至るまで、主としてドイツが中心だけでもさまざまな思想上あるいは宗教上の書物が体系だてて買っている。しかも例えばギリシャの哲学でしたらギリシャの哲学についての二次文献ですね、その研究書というものも非常に体系だてて買っている。安田先生はどういうところからそういうことができたんだろうか私にはよく分からない、ということを訓覇さんが書いてらっしゃいますが、これは講義の中にもよく外国語が出てきたり外国の思想家やとくに神学者の話が出てきましたね。そういうことについていわゆる哲学の専門家はかなり批判的だったそうです。安田理深という人はちょこちょこ外国語を使うけれどもあんなものはインチキだというようなことをおっしゃったりした人もあるようです。

で、僕はそれは必ずしも当たっていないとは思いません。というのは、ある言葉のある程度まで習得した人が使う使い方というのは、単語じゃないんですね。文章なんです。安田先生の場合は主として単語の段階です。そうすると例えばドイツ人にもものを言わなきゃならんときには、僕でも衆生という言葉がサットバというサンスクリットという言葉だという事ぐらい使えます。ですけどぼくはサンスクリットができるとは全然思っていないし、事実できないわけですね。そういう意味で安田先生に対する批判が当たっていないわけではないのですが、少なくとも私が見ている限りでは安田先生の使われるヨーロッパの言葉の単語が非常に的確なんですね。これは例えばカントにしてもあるいはニーチェにしても、先生は隅から隅まできちっと読んで、まして研究書まで読んでというようなそういうことをなさったとは思いません。思いませんが、お使いになる言葉が実に的確で、その場合はもちろん安田解釈です。当然ながら安田解釈ですがその解釈が決して忝意ではなくて、先生自身の思想信仰というものをヨーロッパの学者ヨーロッパの思想家に当たってみて確かめてらっしゃるような感じがしました。

例えば使い方が「先生それは違いますよ」というようなことを僕の知る範囲で言いますと「そうかね、じゃあどういふふうにとったらいいかね」とその辺は実に素直なんですね。ですから例えばニーチェというのが出てくると「超人」というのが出てきますね。超人というのはだれが訳した言葉か知りませんが、英訳はスーパーマン (superman) なんです。スーパーマンというと現代の日本では変な感じになりますが超人 (übermensch) という言葉の英訳はスーパーマンなんです。超人というのはどっかに超人という物が、あるいは人がいるということではないと思います。僕は「人間的なものを超えること」という、つまりいえば超える

というところに力点があるんで、超えるというところにむしろ意味があるんで、人間は超えられるものだというふうにニーチェは言っていますから、そういう意味だろうと思いますよ、という「ウーンなるほどね」というふうに聞いてくださる。

ですから先生の場合はそういうニーチェのことにしてもゲーテのことにしても、あるいはギリシャの哲学の人もあるいはスピノーザにしても、けっしてそういうものをちゃらちゃらさして、我々をびっくりさせてやろうというそういうようなことでは決してなくてご自分の思索なり信仰なりと対決させてらっしゃる。あるいはそういうものによってご自分の思索を確かめてらっしゃる。そういう意味では先生の思索、先生の信仰というのは決していわゆる狭い意味での仏教に止まっていない。仏教とキリスト教とくっつけて何かするというそんなことじゃないんですよ。そうじゃなくて先生が仏法の中に沈潜していかれると、その一番奥のところで、すべての宗教性みたいなものが出会えるところがあるというようなことを先生は確信もってらっしゃったと思います。

そういう言葉が、例えば私が覚えている言葉ですが、こういうことをおっしゃったことがあります。「すべての思想はそれが本物である限り必ずどこかで交差する」と。ピタッと一緒になるという意味じゃないですね。交差すると。そういうことをおっしゃったことがあります。これも私にとっては大変貴重な言葉ですね。本物の思想はどこかで交差するんだと。その交差点をどこで見つけるかということが、たんにほかのものとは比べるというようなそんなことではないんだというようなことをおっしゃったことがいまだに頭に残っています。

こういうことは私寡聞にして他の人から聞いたことがないんです。すべての思想はそれが本物である限り必ずどこかで交差すると。ですから先生のお話しにはマルキシズムも出てきます。マックスウエーバーも出てきます。ですけどそれは決してつけたりにおっしゃったか“おれだってヨーロッパのことを知ってるぞ”とそういうようなことではなくて、その交差点を先生はたえず求めてらしたと思うんですね。これは先生のご一生を聞いてみますと、最初はキリスト教に関心をおもちになって十代のころ教会にお通いになったということがあったそうですが、そういうような先生の経歴からも来るのかも知れませんが、その姿勢はずっと最後までお通いになった。だからそういうところに先生の何といたらいいのでしょうかね、開けといいますか、あるいはもうちょっと堅いことでいえばたえず普遍性を願っていらっしゃるという点がたとえばそういう点に出てきている。何もヨーロッパのことをいわずにやらんということじゃないんですけど。そうではなくてそういうものにあたってその交点を求めていらっしゃるところにけっして我が思いではなくて真実というのはそういうものなんだということを確認していらっしゃる、そういう感じが私には非常に強くしました。これは決してたんなる比較というものではないと思います。

それはあるところで先生はお書きになっていらっしゃいますが、昔は世界だとか人類だとかいうのはたんなる抽象概念であった。だけれども現代はこれが歴史的な現実概念になっている。つまりここで起こったことがすべて全世界に、それこそリアルタイムに反応するし、アフリカの南で起こっているようなことが我々にすぐ反応してくるという、そういう表面的なことではなくて、人類とか世界というのが実際に現実の概念になっているということはまったくそのとおりでと思います。そうするとそこにすべての思想に対してオープンになっている、そういう開けみたいなものがあって、これは先生の、まあ私から見ますと他の諸先生方になかった一つの特徴ではないかと思うんです。

昨日も藤枝さんといろんなお話ししているとき思ったんですが、そういう意味で安田先生というのは「単独者」という言葉で言えるのじゃないかなという感じがします。独立者という言葉で言ってもいいと思いますが、というのは例えば若い時から安田先生は興法学園あるいは相応学舎それから真人社それから我々のこの大地の会、そういうところで一つの共同体の中でいつも中心的な役割を果たしてくださっているわけですね。そういう中で求道と思索を徹底して貫いていらした。

で、先生としては曾我先生、これは宗さんがいつか書いてくださっておりますけれども、安田先生は曾我先生を了解することが自分の一生だったというふうにおっしゃっている。ですから曾我先生が安田先生の師であることはこれは間違いないのですが、そういう師弟の関係あるいはそういう共同体の関係、そういうも

の中でも私にとっては安田先生というのはたえず単独者としていらした。そんな感じがしてしょうがないんです。でその単独者という意味は、うまくいえないのですが共同体の中で自己を失って埋没するというのが我々の在り方ですね。大地の会でもたしかにこういう会があつて私たちにとつても非常に大事な会で、だからしゃべると言われても「はい」というよりしょうがないんですけど、にもかかわらずこういう会にある色がついてその中に埋没して行く。あるいはその中に自分を失って行くという、自分を発見するための会が自分を失わせるというようなものが一つの共同体の中に非常に危険なものとして存在することがあるんです。

それは話が大変前後しますが、じつは安田先生の話聞きに行こうとしたのは昭和でいうと二十二年か二十三年ですから、僕らがまだ十代の終わりくらいだったんですが、宮城のお父さんはそれこそ安田先生の非常によき友でして、宮城のお父さんから安田君の話をいっぺん聞いておいでよ、ということで、まだその頃上賀茂の一軒家だったんですが、そこへ藤元君と行ったと思います。ところがそのときぼくは先生にお会いできませんでした。先生はもちろんいらっしゃいました。先生の講義も一回は聞いてきたんですがそのときの相応学舎の雰囲気はなんとも嫌な、どう言ったらいいのでしょうかねえ、会そのものが独りよがりになっているんですね。

これはさまざまな団体、とくに宗教団体というのにはそういう危険があるわけですが、とにかくこんなところに二度と来るものかと思っちゃったんです。で、藤元君と出てきて“おれ、もうこんなところ来ないよ”と言ったら、“おれもいやだ、こんなところは”と。ですから先生のところへ行つたのに先生にお会いできなかったのです。それで自分がそのうちにドイツ文学なんかやりだしてヨーロッパへ行つてさっき申し上げましたそういうときにほんのわずかの二三の人ですけども、本当にクリスチャンだと私に思えるような人に出会う。そうすると神の話が出る。私には分からない。いようなところでうろうろして、一体自分というのはどこに向かつて行つたらいいのかというような、まあ簡単にいえば僕自身のアイデンティティが分からなくなったというよりも今まで求めてなかったということだと思いますが、それで帰つてきたときにこの大地の会を始めようという宗さんたちを中心にしてそういう話があつて、そしてこれは僕自身のためにできた会だと思つて参加さしてもらいました。そのときに初めて安田先生にお会いできて、さっきからゴタゴタ申し上げてきたいろんなことを先生に感じるんですが、たしかに先生のまわりにたえずお弟子さんが集まるといふ形になってきてはありました。

それは一方では大変すごいことなんで、安田先生の相応学舎が燃えたときにその後で皆さんの寄付金でもつて再建ができました。私の女房はあんまり宗教とは関係ない人間なんです、それがびっくりしたと言いましたですね。肩書も何もない安田理深というたんなる仏法者の家が焼けたと。そしたら全国からお金が集まるとにかくまあまあ家ができた。と。“こんなことめつたにないことですね”と言いました。だからそういう意味で、そういうお弟子さんたちが先生を支えてきたという面は本当に見事なことだと思います。思いますが、にもかかわらず先生は、やはり単独者でいらした。ですからこうして先生がお亡くなりになりました十五年もたつて思いますが、何か私には先生の後ろ姿が見えるという感じがするんですね。たしかに講義のときには我々の方を向いて講義してくださいましたけども、先生の求道と聞法と思索の姿というのは私にとっては後ろ姿なんです。多分その前に曾我先生がいらっしゃるのでしょう。ずっとその向こうに清沢先生もいらして、「自己とは何ぞや」といふようなことが書いてあるそちらへ向けてひたすら先生が歩いていらっしゃる。

で、我々も弟子として友として安田先生を通してそちらへ向かつて歩いて行こうというのが多分、そういうことからして安田先生の後ろ姿が見えるということの、私の感じはそういうところから来るんじゃないか、けつして多数に溺れない、かといつて来るものを拒まない、でき上がるものについては真剣にやってくさる。けどもご自分はいくまで単独者として精一杯の生涯をお送りになつたと、そういう先生に会えたことが大変有り難いことと同時に、大変大きな課題を与えられているわけで、安田理深を友としうるかと、大変生意気な言い方も知れませんが、安田理深を友としうるかというのが今の私にとっての課題です。大変不十分なまとまりのない話でしたが気持ちの一端を聞いていただきましてこれで終わることにします。ありがとうございました。